

史料にみる **歴** **史**

文明開化の象徴・銀座 ～錦絵が伝える社会～

『東京開化名勝京橋石造銀座通り両側煉化石商家盛栄之図』
(マスプロ美術館蔵)
〔社会科 中学生の歴史〕 p.154掲載

銀座は東京都中央区にある繁華街ですが、その地名は、江戸幕府の銀貨鑄造所である「銀座」に由来しています。1869年（明治2）年に正式な町名となりました。新橋―横浜間にしかれた鉄道や築地の外国人居留地と結びついた銀座は、西洋の雰囲気や香りがするところとなり、舶来品や情報などが流れ込んでくる入り口として発展していきました。

こうした銀座は文明開化の象徴となり、たくさんの錦絵が描かれました。なかでも銀座煉瓦街がその中核でした。この錦絵には、「東京開化」と記してあります。新しく目につくもの―「開化」によって登場したものが、たくさん描かれています。これまでの生活のなかにはなかった建物、乗り物から、衣服や持ち物などまで、実に多くのものが取りあげられました。女学生や盛装した女性も登場しています。

史料として、この錦絵を見ると、2つのことを指摘することができます。1つは、この錦絵が描かれたのは1874年であり、そのときの意識が投影されていることです。確かに、明治政

府は銀座煉瓦街を文明開化の象徴とするのですが、それでもこのように華やかな局面だけではありません。一步裏に入ると、これまでの街なみが残っていました。

そもそも、1872年2月にこの地域一帯で大火があり、そのあと、由利公正東京府知事の建白によって、この地域に住んでいた貧しい人々を追い出し、東京の外観を整備する計画が着手されました。築地の外国人居留地の近くにある銀座に、美しい煉瓦造りの街なみをつくって、不平等条約の改正を有利に運ぼうとしたのです。このように錦絵を見る場合には、描かれなかった側面もあることに注意しながら、読み解く必要があります。

そしてもう1つは、上記のような事情はありながらも、銀座が新しい都市づくりの象徴であったということです。大火の直後より、イギリス人技師ウォートルスの指導のもと、ほぼ3年をかけて表通りを煉瓦街にしました。ロンドンの繁華街をまねたのですが、列柱廊が見られ、バルコニーつきの洋風建築がならんでいます。みな、赤煉瓦造りの二階建てです。道路も煉瓦で舗装されています。ここでは火事にあっても焼けない、不燃都市がめざされました。また、この錦絵では、道路の両側に桜が植えられていますが、楓や松も街路樹として植えられました。街路樹のあいだには85基のガス灯が設置されましたが、その蒼白い炎が煉瓦街の夜を照らす文明のあかりとなったのです。

洋風の新しい繁華街である銀座の煉瓦街は、江戸時代以来の浅草や上野とはまったく違った魅力をもっており、たくさんの人と物が集まってきました。この錦絵ではいささか誇張されていますが、それでも開化の場所であったことは間違いありません。さまざまな服装は、もちろん性別や年齢のちがいが、あるいは階層や職業の相違にもよりますが、さらに新旧の軸が入り組んでいるところに文明開化期の特徴があります。

よく見ると、洋装と和装の人物がおり、1人の服装のなかにも和と洋が入りまじっています。ぞうりを履いている人物とともに、靴を履いている人物がいます。なかでも目につくのは「こうもり傘」と呼ばれる洋傘で、洋風趣味の象徴でした。外国人らしき人物も描かれています。

また、この錦絵には、たくさんの開化期の乗り物も描かれています。人力車は、1869年に和泉要助が発明したといわれていますが、中流以上の人々の乗り物として発達しました。また、新橋―浅草のあいだには、乗り合い馬車が走っていました。まさに文明開化の最先端です。

銀座界限には新聞社も集まり、煉瓦街の要所には東京日日新聞社、読売新聞社などの新聞社が社屋を構えていて名所となっていました。なお、この錦絵には富士山が描かれていますが、江戸＝東京を描いた錦絵では富士山を入れることが約束事となっていたからです。江戸時代から、富士山は東都の象徴だったのです。

(日本女子大学教授 成田龍一)